

# 会 議 要 旨

会議名	第3回館山市景観計画策定委員会
開催日	平成30年3月26日（月）午前10時～午後0時10分
開催場所	館山市役所本館 2階会議室
出席者	館山市景観計画策定委員会委員10名 事務局：建設環境部長、都市計画課5名、委託事業者3名
公開・非公開の別	公開
非公開の場合の理由	
傍聴者	0名
会議概要・結果等	<p>■議 事</p> <p>(1) 館山市が目指す景観まちづくりについて</p> <p>(2) ゾーン別景観まちづくりの方針の検討について</p> <p>(3) 平成30年度館山市景観まちづくりワークショップについて</p> <p>■会議概要</p> <p>(1) 館山市が目指す景観まちづくりについて</p> <p>(2) ゾーン別景観まちづくりの方針の検討について</p> <p>○委員の1名より、景観の定義等についての意見あり。</p> <p>⇒「景観とは何か」について、定義をした上で議論を進めていく必要がある。景観には二つの意味があると考えている。まず、地域の風土や気候・地形・地質など。人の営みがあり、そこに自然の営みが加わり、歴史が刻まれ結果としてできた風景である。</p> <p>もう一つが、景観は外面だけでなく内面も伴っているということ。景観を議論する際、どうしても外見だけについて終始してしまうが、景観は外側であり、必ず内側を伴っている。人体で言うと、体の内臓の調子が外面である表情や皮膚に出るといったこと。南欧風の街並みについても、形だけ整えても、そこに住む住民が、南欧の方のように、普段パエリアを食べたり、フラメンコを踊ったりしているわけではない。南欧風の街並みの基準となっているオレンジ色が一人歩きし、ペンキで無理やり塗った人工的なオレンジ色の屋根が公共施設を含めて増えてきてしまっているのは、望ましくない。</p> <p>また、景観行政については、競争力の視点が必要であると考えている。景観に取り組むことで、他の地域にどうやって勝っていきけるのか、差別化できるのかといった考えも必要なのではないかと考える。</p> <p>次に、景観と建物については、自然の景観だけでなく、人工の景観もあり、その代表が建築物である。建築物は、地域の歴史を物語る非常に重要なものである。館山市においては、里見の城下町は残っていないが、震災があった1923年以降に復興された商家群が、</p>

長須賀にまとまって残っている。こういった箇所は景観条例等で保全していくべき大事なエリアだと考える。

館山市で進めている花のまちづくりについては、住民主体の活動を推進していくことで、望ましい景観づくりに寄与していけるのではないか。

#### ○上記意見に対する他の委員の意見等

⇒(委員長)景観法には、「景観」の定義が書かれていない。館山市における景観とは何かを考える必要がある。今出た意見にあったとおり、「景観とは、その地域の風土的特性に自然や人の営みが変わり、歴史となり、表出した視覚的な姿」といったような表現になる。ここに館山独自のものを加えることで、定義になってくると考える。

⇒景観は「現れ」という側面がある。プラスもマイナスも含めて、人の生活自体も含めて景観が形成されている。

#### ○南欧風の街並みに関する委員意見

⇒館山市都市計画マスタープランに、「“南欧風の景観”の指導内容の見直しを含め、市全体の景観形成の方針の明確化が必要」と記述されている。総合計画を見ても感じたが、南欧風の街並みづくりにも揺れ動きがあるように見える、オレンジ色が一人歩きしている部分を止めなければならないと考えている。

⇒(委員長)南欧風の街並みづくりを始めて30年経っていると聞いている。今後も続けていく場合、今までの取り組みについての評価等について、調査をかけた上で進めていかなければならない。

⇒東京から館山に向かう際、ある地点から「南国だ」と感じる場所がある。何か風土が大きく切り替わるという感動がある。開放感とも言うのか、そういった部分から当時は即物的に「南欧風」に結びつけたのかもしれない。そのように感じる部分は、グローバル化の時代なので活かして、今までの取り組みを否定するのではなく、南国の開放感やそこで暮らしている人の性格などを含めた、新しい景観を考えていくという展開も良いのではないか。

⇒(委員長)確かに、鋸山を越えた辺りから東京の磁場が切れたと感じる。そういうことの大切さは絶対にあると思う。言葉として、たまたま「南欧」という言葉に置き換えているのかもしれない。ただ、現在では、オレンジ色が一人歩きしているといった状況になってしまっている。南欧風に至った根っこに立ち返って、正しい表現だとどうなるのかが重要なポイントと考える。

⇒当時のフラメンコフェスティバルで配布されていたパンフレットに、画家の先生のメッセージが書いてあり、「市長に、館山の海辺がスペインに似ていると話したら、やってみようという話しに

なった。」といったことが書いてあった。思いつきは悪いことではないが、安易に始まったような気がしているので、ほどほどにしておくべきかと思う。

⇒自分は移住者だが、市外へ出かけた際に、富浦インター付近になると、「懐かしい、帰って来た。」という気持ちになる。南欧風の建物についてもそこまでの違和感を感じていない。先程出た、画家の石井崇さんはスペインにも長く在住していた方で、南欧風のコンセプトに影響を与えているのであれば、石井さんの絵画を飾るだとか、さらに言うと石井さんが住んでいた南スペインのフェレイローラ村と姉妹都市締結のような取り組みをするなど、説得力があることをしても良いのではないか。現在の取り組みは壊せない。後付でも良いので、文化的な部分を入れていく必要があると考える。

⇒館山自動車道を降りて、館富トンネルを抜けると、ヤシの街路樹があり、「館山に帰ってきたな」と感じる。ただ、自分の場合、決してそのヤシを「南欧風」として捉えているわけではない。温暖な地域としての現状の館山の景観は、悪くないと感じている。八幡地区から渚の駅にかかる部分の海沿いの景観も、決して支障があるとは感じていない。ただし、海辺のまちづくりを表明しているので、市外から来る方に海辺の景色を見せるような配慮をすべきと考える。

⇒（委員長）現在進めている、南欧風の街並みづくりを積極的にやめることはできないので継続していかなければならない。ただし、景観計画をよりどころに、回収率 40%程度の市民アンケートを根拠に、厳しい規制をかけるのは難しいと考える。お願いレベルになってしまうかと思う。

⇒文化財の保護を行う時は、常に観光という視点を意識する。観光はいわゆる平和産業だと考えていて、戦争などとは逆の位置にある。観光まちづくりを進めるということは穏やかなまちづくりを行うことで、そういった面で活用するのであれば、南欧風も良いかもしれない。ただし、エリアについては、現状の重点地区だけに限定すべきと考える。

⇒やはり、オレンジ色のペンキで塗った屋根は違和感がある。素焼き瓦のオレンジ色と近いという印象も持てない。景観計画策定後の話しになるかもしれないが、自然の瓦の色を使っていく方向に修正していつてもらいたい。公共施設でも自治体が率先してオレンジ色のペンキ塗りをしてしまっている。

⇒（委員長）そのあたりは、景観計画の先のガイドラインか何かで、素材などについて誘導を図り、ペンキなどの上辺のつくろいを控えるように規定すれば良い。また、「南欧風」という表現は見直しても良いかと思う。「風」と言ってしまうとまやかしが入り込んでしまう。代替りの言葉として、東京からの自由、関東で一番春がくる暖かさ等を表現できる良い言葉を探して詰めていければ良い。

○その他の意見

⇒計画の策定までに期間が限られている中で、市民ワークショップ等を開催するにあたって、ある程度の目標や方針を明確にしておかないといけないと思う。具体的な目標として、都市景観大賞の受賞を目指すのはどうか。スローガンを決めることで、個々の活動が目標に向かっているのだと市民も感じることができる。

⇒（委員長）賞については、現地審査をしないで写真だけで決めてしまうこともあるので、それだけを目指して掲げるのには注意が必要となる。

⇒景観大賞を目指すのは良いかと思う。

ゾーン区分についてだが、資料にある7つのゾーンで良しとするのかは議論が必要。住宅エリアの中でも、城山周辺は、長須賀まで含めて一体となっている旧市街地だと思うし、鶴谷八幡宮周辺は歴史が古いが、新しい市街地も形成してきている。また、那古船形も昔ながらの漁師町で、細い道が入り組んでいたりする。これらのエリアは要素・歴史が違うので、もう少し詳しく見ても良いかと思う。

⇒（委員長）エリアの解像度を上げた場合の分析については、是非検討すべきかと思う。

それから、館山人はこういった気質があるといった特徴的なものはあるか。

⇒館山人には、何かと一番を目指さない気質があるように感じている。このくらいでいいでしょと言って終わってしまう。

⇒外の人から見ると、逆にそういった部分に安心感や温かさを感じるのではないか。

⇒館山には、歴史がある10のコミュニティがあり、評価できるものである。ただし、現在では、移住者が町内会に入らなかったり、形骸化してきている面も見られる。地域コミュニティは地域の力ではないかと思う。また、景観形成の特徴としてオンリーワンの場所が館山にはたくさんある。地形が隆起していて非常に特徴がある。

⇒（事務局）歴史関連の箇所については、庁内検討委員会においても計画に記載する内容を博物館や生涯学習課などの関連部署で検証することとしているので、その中で改善を考えている。

⇒（委員長）今あった10のコミュニティについては重要な話なので、景観計画内に記載した方が良いかと思う。

今回、各委員より活発な意見をいただいたが、再度、館山という土地柄をどう読むか、「南欧風」という言葉に置き換えられる以前の東京の磁場から離れられるとか自由といったものの表現をどのようにするのかを考える必要がある。景観まちづくりの目標も、単に「海、花、里山、人」というだけでなく、房総半島の先端にある大らかさ、ゆるさや温かさを表現していくことができるのではないか。

⇒（委員長）「緩さ」は非常に大切なキーワードだと思う。「緩い生活」と表現されるように、人間関係等でも、適度な距離感を持った付き合い方をするといった所に、多くの人が魅力を感じているのが、今日の傾向の中で、そういった緩さが景観まちづくりの重要な方向性を照らしてくれるのかもしれない。

その他、景観まちづくりの表現・解釈のツールとして、南総里見発犬伝の8つの玉（徳目）を使うのも面白いかもしれない。

⇒先程、話が出た、賞を目指してはという議論については、具体的なゴールをイメージすることで到達レベルを明確にするということであったと思うが、NPOなどがまちづくりに取組む際には「誇りと愛着」の2つが核となってくる。賞を取ったりすることは誇りに繋がる材料となる。また、愛着があれば、活動にも深く関わって、結果（誇り）に繋がってくる。

⇒（委員長）個人的には、逆に、館山市が賞をつくるのも良いと思っている。どういう活動なら賞を与えるべきかを話し合っ決めて。景観条例の中で賞を設けるということも可能である。その方が活動を前に進めるためのサポートに繋がる気がする。

⇒エリア区分について、農村集落エリアに分布されている中で、国道127号線より東側については、宅地開発している所もあり、区分を変えた方が良いかと思う。

⇒今後のスケジュールについて、10月までに景観計画（案）まで進めるとした場合、ピッチを上げていく必要がある。

⇒（委員長）その点については、懸念しているが、本日の議論の中で、「南欧風」に代わる表現ができるのではないかと皆さんの中で合意ができてきたのではないかと思う。それを軸に、遅れているスケジュールを取り戻していければ良いと思っている。